

目指す学校像	「教育は人なり」をモットーに、教育目標の「やり抜く子の育成」の実現のため、①笑顔輝く子 ②力を磨き合う教職員 ③考え、対話する組織を柱としたチーム指扇小が一丸となり、学びの改革を推進する。また、Well-being な学校を目指し、笑顔の花咲く指扇コミュニティ・スクールを拡充する。
--------	---

重点目標	1 主体的・対話的で深い学びを実現するため、教育指導の充実に努める。 2 安心・安全の視点の下、教育環境の整備に努める。 3 子どもを見守る教育の推進を図るため、学校、家庭、地域との連携を深める。 4 専門性・得意分野を活かして力を発揮するプロ集団を目指し、教職員研修の充実に努める。
------	---

※重点目標は4つ以上の設定も可。重点目標に対応した評価項目は複数設定可。
 ※番号欄は重点目標の番号と対応させる。評価項目に対応した「具体的方策、方策の評価指標」を設定。

達成度	A	ほぼ達成	(8割以上)
	B	概ね達成	(6割以上)
	C	変化の兆し	(4割以上)
	D	不十分	(4割未満)

学校自己評価							学校運営協議会による評価			
年度目標							実施日令和7年1月29日			
番号	現状と課題	評価項目	具体的方策	方策の評価指標	評価項目の達成状況	達成度	次年度への課題と改善策	学校運営協議会からの意見・要望・評価等		
1	(現状) ○全国や市の学習状況調査において、学習へ関心・意欲・態度に関する質問に対して肯定的な回答の児童の割合が、全国や市平均を上回り、良好な結果である。 ○特別活動における「指小スタンダード」の活用により行事や委員会活動等で挨拶や説明を行ったり、学習においてプレゼンテーションをしたりすること等を意欲的に取り組んだりできる児童が多い。 (課題) ○全国や市の学習状況調査の分析結果から、課題解決に向けて粘り強く学びに向かう力(非認知能力)の向上を実現する。 ○学習に自信をもてない児童が多い現状があり、学習の意義を実感し、経験を通して達成感や充実感を味わえるようにする。	・学びの自律化 ・探究化に向けた授業改善と情報端末の活用、 ・ともに学ぶ学校「真の学力の向上」「非認知能力の向上」を実現する教育活動の展開	① 児童が目標をもって主体的に探究的に学ぶ授業を実施し、教職員が学びの指標により状況を分析する。 ② ICTを活用した授業を学期1回以上公開し、ICT活用力、授業力を磨く。	① 学校自己評価(児童)の授業に係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。 ② 学びの指標等、ICTの活用に係るアンケートの肯定的な回答が市の平均より上回ったか。	① 学校自己評価(児童)の授業に係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。 ② 調査結果の分析結果を踏まえ、教職員が各自、授業改善の視点、手立てを設定することができたか。 ③ 非認知能力向上のための「指小版評価システム」を構築する。	児童が各自目標をもって主体的に授業に参加するため教職員が常に意識をし、教材研究をしっかり行ったり探究的な学びができるよう内容の精選も随時行ったりした結果、児童のよい授業という肯定的な回答が昨年度を0.07P上がった。また、ICTの活用では活用率を上げる努力だけでなく、エバンジェリストの協力の下、授業のねらいに迫るための効果的な使い方ができるようになってきた。	B	ICTの活用率も年々上昇である。授業では進んでタブレットを開く児童の姿、得意げに使いこなす児童の姿が全学年の教室で見られる。一方、授業のねらいに迫る素晴らしい使い方だと納得するような活用方法が見えるものは一握りである。研鑽を積み、よい手立てを学び、自校のICTのよりよい活用のスタイルができるようにする。	・リフレッシュ工事が今年度から本格化し、3学期から仮設校舎での学校生活になった。様々な制限の中、学校の様々な工夫が見られる。 ・体育では「さいたま市滝沼川第2遊水池グラウンド」借用の下運動機会の減少、体力低下等を防ぐため、時間割変更や複数学級での実施等工夫がなされた。 ・一方、学校行事『運動会』はグラウンド半分の借用という制限により縮小版となった。来年度以降数年の運動会実施に向けて対策を練って、よりよいやり方を探るとよい。	
2	(現状) ○学校自己評価(児童)結果 質問「友達の気持ちを考えて、仲よく過ごす」に対して肯定的な回答が3.64点(4点満点) 質問「運動会などの行事や集会活動を楽しみにしている」に対して肯定的な回答が3.56点(4点満点)である。前年度比より上回った結果となり、学校が楽しみであることが伺われる。 (課題) ○児童一人ひとりの児童理解・状況把握を確実にし、個別最適な支援や相談対応をするために組織的な体制を強化する。 ○リフレッシュ工事に伴う教育環境の変化に柔軟に対応できる安心・安全な管理システムを構築する。	・個に応じたきめ細かな教育支援や相談等の校内体制の充実 ・安心・安全な学校の実現に向けた教育活動の土台の強化	① 「心と生活のアンケート」「SSSP」等により、児童各々の状況を継続的に把握する。 ② 3部会(生徒指導・教育相談・特別支援教育)をはじめ、ケース会議やミーティングを実施し、組織的に支援や相談を行う。 ③ 校内教育支援センターSolaの一む『スマイル』により個に応じた組織的支援を実施する。	① 学校自己評価(児童)の学校が楽しいかに係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。 ② 学校自己評価(教職員)の児童理解に係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。 ③ 学校自己評価(保護者)の相談等に係る項目の肯定的な回答が昨年度を上回ったか。	児童の「学校が楽しい」という肯定的な回答が昨年度より上回った。「友達と仲よく過ごす」は0.06P「行事等が楽しみ」が0.08Pアップした。これは保護者も教職員も感じている同等の評価を得た。また、新しく導入されたSSSPも軌道に乗り、活用の進む中、3部会やケース会議等での情報交換し、組織的体制で難しい案件と対峙した。その中でも校内教育支援センターSolaの一む『スマイル』は児童が活動に意欲がもてる場所となった。	B	保護者の相談については、「学校が、親切・丁寧・迅速な対応ができていくか」は、3.41P評価を得たものの0.04P昨年度を若干下回ったが、多岐に渡る相談や対応が多く、担任以外の教職員全体が相談に乗れる体制を組む複数対応で相談に乗る等の対応を行って、ニーズに応えている。さらに、SC、SSWとの協力や他機関等との連携を益々強化し、学校の対応力が向上するよう、改善する。	・毎年、いじめ防止・根絶を誓う各クラスのスローガンの看板を掲示し、大変効果が高いと評価がある。仮設校舎による掲示制限に伴い、防犯看板に替えての実施は良案であった。 ・校内教育支援センターSolaの一む『スマイル』の今年度実績は8～9人くらいの児童の居場所となったことである。 ・スマイル委員会教職員チームが一丸となり組織的に児童を支援する仕組みが画的である。 ・『スマイル』の在り方も構築し人材の幅も検討するとよい。 ・不登校児童が12月の同時期で、昨年度より2割減少した。教職員の総力を結集した安心できる学校づくりが功を奏した。		
3	(現状) ○「笑顔の花咲く指扇」コミュニティ・スクールにおいて「郷土愛」「社会性」を育む取組が推し進められている。 ○創立150周年記念事業の成果により、地域と学校のつながりが見える、社会に開かれた学校づくりが進んだ。 (課題) ○学校運営協議会が主体となり、学校と地域がさらに繋がるための情報発信や協働的な取組を実施する。	・地域とともにある学校づくりを目指した指扇ネットワークの構築 ・地域とのつながりを強くする方策や機会の創出	① 学校運営協議会にて、目指す子ども像を具現化する方策を協議する。 ② 持続可能な取組の実現のため、PDCAサイクルに則り、評価、改善を行う。	① 学校運営協議会年3回の会議を要し、SSNに関連するネットワーク会議を実施できたか。 ② 目指す子どもの姿を実現するため具体的な取組を企画・実施できたか。次年度へつながる手立てが、講じられたか	学校運営協議会の協力的支援やリードにより学校ネットワークが強化され年3回の会議を通して児童の地域とのつながりを強める行事に参加する機会が膨らんだ。「指扇まつり」に吹奏楽部がコロナ後2年連続参加、「避難所開設訓練」にチャレンジスクールが2年連続参加、近隣校の「米づくり体験」に初めて特別支援学級の参加が叶った。	A	「郷土愛」や「社会性」を備える児童をどう育てていくか、地域とつながる機会をどう見つけるかなど、熟識し、アイデアを出し合っている。児童の力が地域に根ざし活躍するような行事や取組を多く知り、学校と地域との協働行事を見出す。			・「米づくり体験」は地域行事への参加となった。これからも長くこの土地を愛し、コミュニティが築けるつながりを増やすことを続けたい。 ・PTAとの連携も含めたホームページを更新したことは、有効な情報発信となった。 ・工事の影響を受ける課題を地域の協力の下、解決した。地域の連携による底力と感じた。
4	(現状) ○市教委の3年間の委嘱を受け、学校課題研究『Well-beingを実感する児童の育成～非認知能力の向上～』が本格化実施となった。 (課題) ○「研修履歴を活用した対話に基づく受講奨励」の取組に基づき、教職員が自身の資質向上のため、主体的・対話的で深い学びをマネジメントし、研修を実施する。	・子どもたちのWell-being～子どもたちがよりよい人生を歩むために～『指扇プロジェクト』の実施	① 専門家の招致を取り入れた研修を推進し、研修組織を設立し、専門部の活動を開始する。 ② 教職員一人ひとりが自身の研修をマネジメントし、履歴を記録する。	① 学校課題研修の取組ができたか。 ② 教職員一人ひとりがキャリア振り返りシートの資質・能力の自己評価が年度当初より上回ったか。また、自己評価シートの研修に係る項目の評価が昨年度を上回ることができたか。	学校課題研修の委嘱1年目として、専門家を大学の附属小学校から招致でき、授業研を実施した。研修組織として、研究推進委員会を筆頭に、3つの専門部が本格的に活動を始動し、論理的に実践的に研究を進めた。その中でも、市教委の指導者や招致した大学附属小の講師から教職員の主体的・対話的で深い学びを積極的に行っている姿勢が素晴らしいと称賛の声があった。	B	2年目、3年目に向けて、研修の進め方を煮詰めて、さらにステップアップする必要がある。新しいことを見出す仮説であるので難儀するが、指導と評価の一体化を目指し、真の学力と非認知能力の向上がリンクし、児童が生き生きと自分の学びを謳歌できる教育活動の推進を行う。			